

「第5回 都市活性化分科会」

大阪湾フェニックス事業、環境配慮し進行

平成27年10月29日（水）

NPO 法人成育環境研究機構（大阪市、岩本康男理事長）はこのほど、大阪湾で関西廃棄物を海面に埋立処分する大阪湾フェニックス事業の見学会を開催した。成育環境機構は、健康・福祉・環境の向上と社会生活環境の創造を図っている。会員向けにセミナーなどを開催しており、今回は埋立処分場を見学した。見学会に同行し、環境に配慮して進む大阪湾フェニックスの処分場を訪れた。

大阪湾フェニックス事業は、1982年に設立された大阪湾広域臨海環境整備センター（大阪湾フェニックスセンター）が実施している。近畿2府4県168市町村の家庭や工場から出るゴミ、工場現場から出る土砂などの廃棄物を搬入施設（基地）で受け入れてから、埋立処分場に輸送している。埋立処分地は、尼崎沖、泉大津沖、神戸沖、大阪沖の4カ所に設置しており、今回の見学大正は大阪沖処分場。

大阪建設事務所（三条健二所長）を訪れて概要説明を受けると、埋立処分場4カ所のうち、尼崎沖と泉大津沖は埋立がほとんど終了し、現在は神戸沖と大阪沖で埋立が行われているという。進捗率は神戸沖が71%、大阪沖は24%。フェニックス計画の目標は2028年3月まで。なお、海面での埋立は全国で唯一、大阪湾だけだという。

説明を聞いた後、見学参加者は連絡船に乗船して夢洲沖の処分場を訪れた。処分場は4400mの護岸で囲まれており。周辺海域の水深は14～15m。船が着くと、すでにバージで運ばれた廃棄物が、処分場のショベルカーでダンプカーに陸揚げされていた。ダンプカーは埋立場所に運んで、次々と廃棄物を埋立処分していった。埋立処分場には、処分場の内水を処理するための浮体台船の排水処理施設が設置されている。排水中の汚濁物質を適正に処理し、処理した水を外海に放流して環境に配慮している。1日の最大処理水量は約5400トン。処分場を見学して、参加者はフェニックス事業が関西に果たす役割を納得していた。

（2015年11月26日（木）「海事プレス」紙より転載）

※ 「海事プレス」紙は航空、海運、港湾にかかわる日刊の物流総合紙



三条所長による概要説明



専用連絡船にて夢洲沖の処分場へ



現地での視察



ダンプから処分場へ



排水処理施設にて



記念写真